

第6号

矢祭町 ゲストハウスプロジェクト
地域おこし協力隊による
活動報告と自己紹介を兼ねた
フリーペーパーです

矢祭町地域おこし協力隊
矢祭町役場事業課:0247-46-4576

2021年1月15日発行

手元焼とは？

六之助は現在のいわき市湯長谷に生まれて、近くに有った陶器産地の赤井焼で陶器職人となり、明治時代後期に矢祭町の宝坂手元に来て陶器を作った豊田六之助のことです。

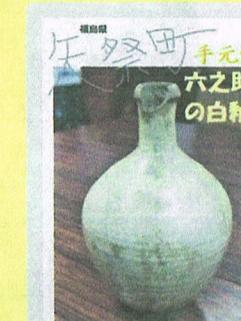
手元の旧家で豊田善左衛門という篤志家が製陶窯を起業したと伝えられています。その豊田家に来て陶工となり、養子となつた六之助の旧姓は三森でした。また手元焼とはいわれていますが、六之助ただ一人が制作した一代限りの窯でした。瀬戸屋と自ら呼んで、在世時には手元焼という呼称はありませんでした。

作られた作品は擂鉢(すりばち)や捏鉢(こねばち)や甕(かめ)、徳利や片口などがほとんどで、当時の生活で使われる日常雑器でした。江戸時代から明治大正昭和の初期までは、現代の生活とは大変異なつていて、たとえば一人ひとりがそれぞれに使うような皿は無く、鍋から直接取つたり、大きな鉢に全部入れてそこから食べることが多かつたようです。手元焼でご飯茶碗が作られた様子はなく、東北では木の食器が普及していたので、木の椀が普段使われていて、特別の食事には塗り物の漆器類が活躍していたことでしょう。湯呑もずっと後になって使われたもので手元焼で作られていませんでした。

特集

手元焼

六之助の
陶芸世界



地域おこし協力隊マガジン

協力隊各人の活動を展開

いつもマガジンを読んでいただきまして有難うございます。ゲストハウスへの歩みも次第に各々に進んできました。ストレートにゲストハウスへ向かう動きもあり、滞在の需要を施設の拡充や周辺環境へと関連付けて、魅力的な体験の場にする企画なども出ています。交流施設を拠点として、多く

の人に町を訪れてもらえるよう、町の

皆様にご指導ご協力をいたしま

る第6号の今回は特集号として川瀬が

担当し、文化財振興という側面から

地域おこしについて紹介します。具

体的なテーマは地元の手元焼とい

う明治

大正時代に宝坂の手元において制作し

ていた焼き物の調査です。

地域おこし協力隊
メンバー紹介

影山陽一

宮城県仙台市出身
前職はPCエンジニア
プライダル音響



佐瀬和宏

千葉県東金市出身
前職は農協職員



近藤秋子

埼玉県松伏町出身
前職は鉄道会社勤務



井上恵

福岡県宗像市出身
前職はグラフィックデザイナー



川瀬孝之（文化財振興担当）

静岡県浜松市出身
前職は書道用品店経営



六之助の白

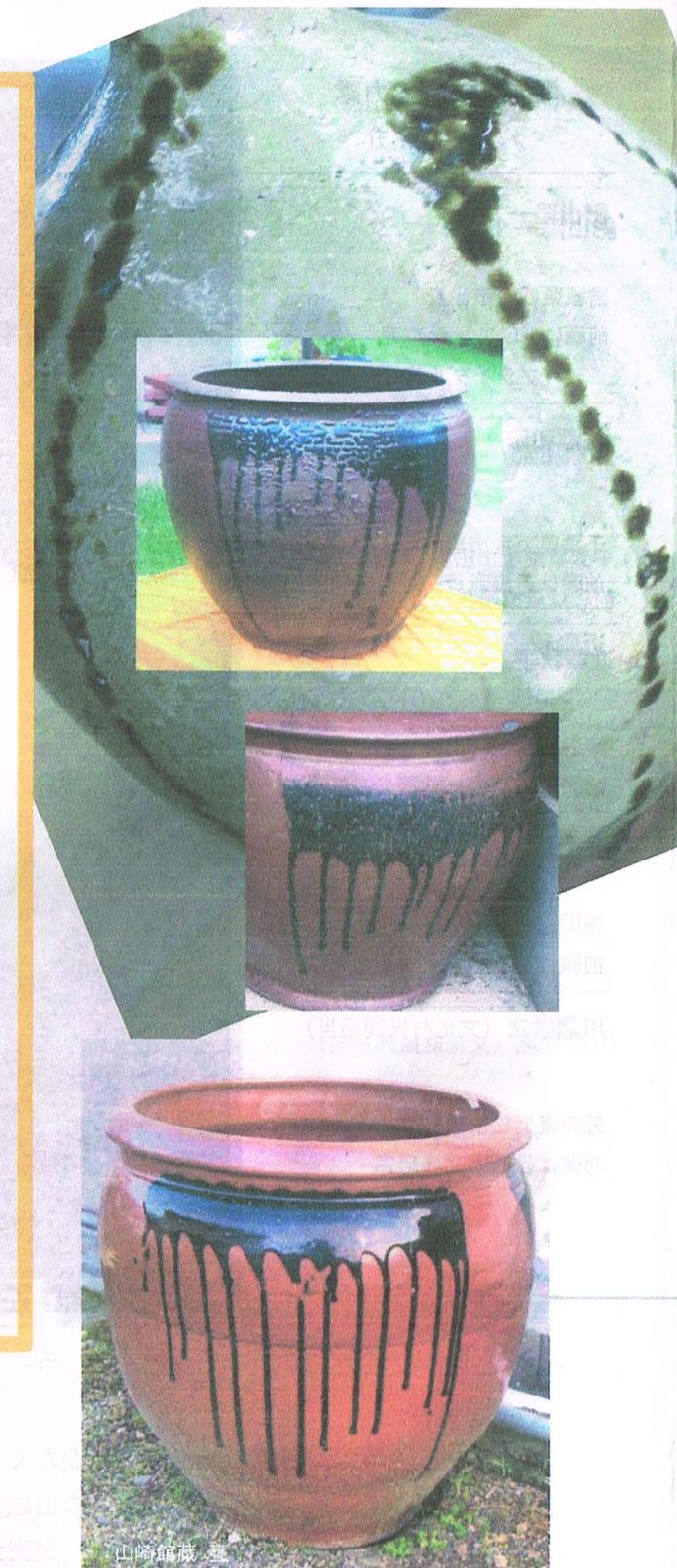
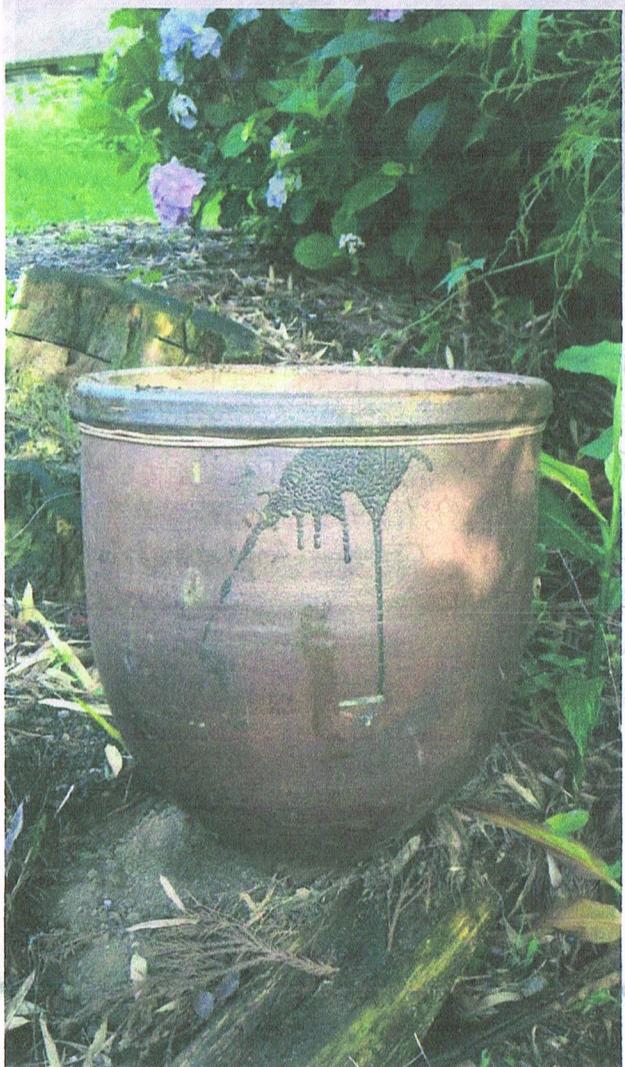
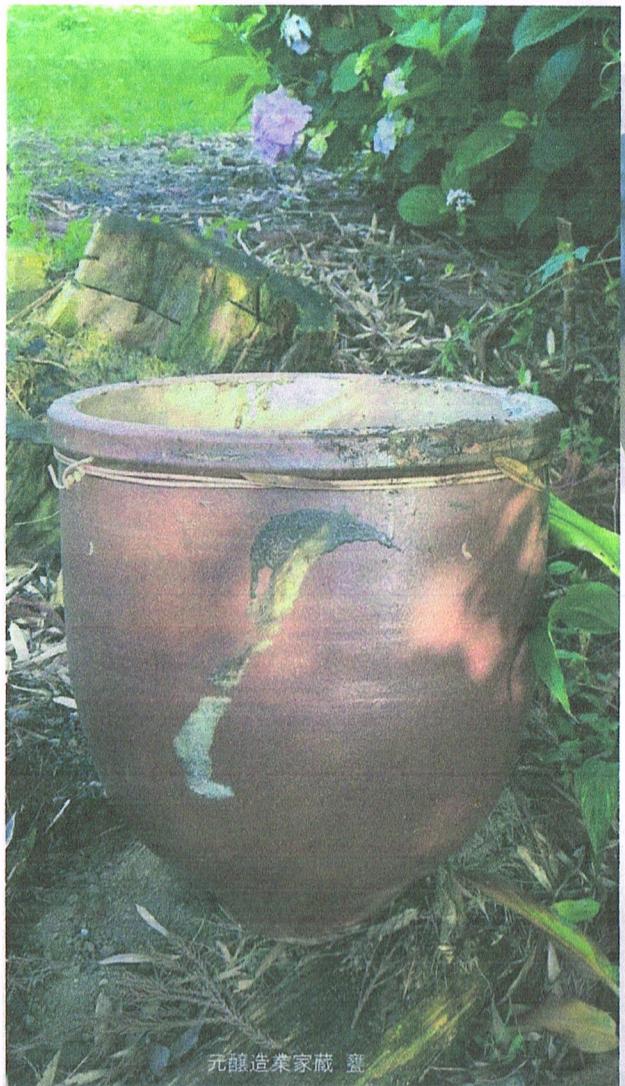
調査をし始めて、白色の無地の徳利がたくさん手元周辺に残っていることに気付きました。白色の徳利といえば伊万里の磁器や朝鮮李朝の白磁が有名ですし、他にも磁器産地がたくさん有りますが、ここで見られるのは器体の粘土（胎土）が完全な白色の磁器ではなく、赤茶色に焼けた粘土でした。鉄分が多くて赤い粘土を使う地方窯では、やはり食器に白い器が求められたためか、白い土が希少で、少量しか取れないとしても、探し出しては器体に薄く化粧掛けして白い陶器をよく作りました。矢祭町に残る白い陶器は当初白化粧かどうか判別が出来ませんでしたが、今では多分白化粧の作品ではなく、すべて白い釉薬が掛かった陶器であると思っています。真っ白い無地の陶器だけではなくて、白い上に茶色の釉薬がかけられたものがあり、緑の釉薬が流し掛けされたものもあります。そしてその胎土は表面が赤く焼き上げられていても、割れたところを見ると中側は淡いグレー色の粘土でした。中まで赤茶色でザラっと荒い粘土のものも色々あるのですが、これは他所の粘土を混ぜたといわれていて、手元焼はこうした磁器に近い材料で作られたものが基本となる焼き物です。このことは陶磁器の分類でいうと陶器というより炻器（せっき）ということになります。

矢祭町中央公民館 蔵 徳利

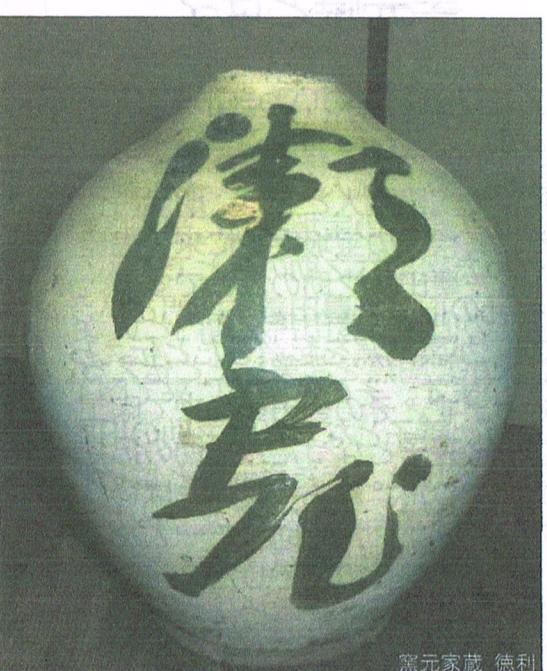
どうでしょうか、私の妄想？

現在の筑西市に生まれて、六之助とほぼ同時期に活躍し、日本陶芸界の最高峰といわれる板谷波山は、六之助の名前も作品も知らなかつたでしょう。地方の民窯に魅せられて自分の制作の糧にし、益子を世界的に有名にした濱田庄司が、もしどこかで六之助の作物を見ることができたならばどのような評価をしたことでしょう。もし板谷波山が分かり、富本健吉が良いといふなら、六之助の静謐な均整を賞味することになるでしょう。濱田庄司の頭と体で鍛えた技を讃めるのならば、内気で地味ながら滲みだす粋を、山間の村で静かに為した六之助の仕事に見出すことになるでしょう。

六之助の美意識を柄杓流し掛けの技に見る



使われるための日常器物は特別変わった形に作られるものがあまりありません。それにしても六之助と思われる陶器は個性的主張が比較的に薄く、伝統的な手法を守ってあまり変化を求めなかつた感じがしています。釉薬の流し掛けでも、几帳面に掛けられているものが多いと思われます。流す施釉はどうしてもムラになりやすいのですが、かなり整っている物をたくさん見ることが出来ます。それにもかかわらずここに見られるように、ちょっと流し方に気が利いているところがあります。これ見よがしの主張が嫌いだったのにもかかわらず、高い美意識が自然に表れたものと思われます。



名もなく美しく

中段右の瀬戸屋の字がある徳利以外は、六之助であるという客観的な根拠はありません。この地域に残されていたものであっても、他所から入ってきたものである可能性があります。作品にはサインも箱書きもなく、そして特別な美術品ではないので、使われて古くなれば忘れ去られてしまいました。そのことからこれが手元焼であるとして伝わっているものは本当にわずかしかありませんでした。様々な産地の陶器の中に、たとえ確実な根拠がなくとも六之助と思える陶器を選び出すことが調査者の仕事となりました。

手元焼だという理由を示すことが大切なのですが、むしろ60個ほどを見た今ではそれらの美しさに魅せられています。

